

# 留学生支援の場としての日本語スピーチ大会 -留学生と日本人学生の異文化間教育の試み-

## International Student Support Activity through Japanese Speech Contest -Creating Intercultural Education Opportunity for International Students and Japanese Students-

国際戦略推進機構・半沢千恵美

キーワード：留学生支援、スピーチ大会、異文化間教育

外国語キーワード：International Student Support Activity, Speech Contest, Intercultural Education

### 要旨

スピーチ大会の支援を通して留学生と日本人学生に交流の機会および学びの場を提供するという目的のもと、本学日本語教育部では「国際理解：国際交流における日本語の役割」という科目を開講している。これは、学内で開催される留学生のための日本語スピーチ大会に出場する留学生のスピーチ原稿の推敲や発表の練習などを、日本人学生を中心とした国際理解科目の受講生に担当させ、またスピーチ大会の運営にも関わってもらおうという試みである。全 15 回の授業のうち 7 回をスピーチ大会支援のための活動にあて、スピーチ大会の運営およびスピーチ大会に出場する留学生のスピーチ発表を成功させることを目標として段階的に活動を取り入れた。国際理解科目の受講生に課した実践活動記録とスピーチ大会に出場した留学生のアンケート結果から、スピーチ大会支援活動に対しては概ね肯定的な評価が得られ、一つの目標に向かって留学生と日本人学生が協力して活動していたことが明らかになった。

The purpose of this paper is to report the international student support activity, which was implemented to support international students who entered the Japanese Speech Contest. The activity was planned to create opportunities for international students and Japanese students to meet and collaboratively work toward the successful presentation at the Japanese Speech Contest. Specifically, those who were in International Understanding (*Kokusai Rikai*) class were asked to provide the Speech Contests contestants with feedbacks on their speech drafts and to help their speech practice. Out of 15 lessons of the International Understanding class, 7 lessons were held to prepare for the Japanese Speech Contest. Furthermore, each student in the International Understanding class took a role in organizing the Japanese Speech Contest. Based on the International Understanding students' activity reports and the survey results by the contestants, it

was found that the supporters and the contestants worked collaboratively for the event, and most of the students in the both groups had a positive evaluation toward the activity.

## 1. はじめに<sup>1</sup>

平成 29 年 3 月に発表された独立行政法人日本学生支援機構の調査結果によると、高等教育機関に在籍する留学生数は前年比で 12.5%の増加を、短期教育プログラムによる外国人学生受け入れ数は 31.4%の増加を見せている。横浜国立大学でも平成 29 年 11 月現在 1014 名の留学生を受け入れており、キャンパスには国際色豊かな顔ぶれが揃う。しかし、留学生と日本人学生が交流する機会は十分とは言えず、「日本人と話す機会がない」といった悩みを留学生から聞くことも少なくない。藤井（2014）は 2003 年度と 2012 年度に実施した留学生を対象としたアンケート結果を比較し、「日本語でのコミュニケーションがよくできない」「日本人とうまくつきあえない」と回答した留学生数が依然多く、日本人との接触の少なさや、コミュニケーションの取り方について困難を感じている留学生が多いことを報告している。

一方、日本人学生からは「留学生と友達になりたいけれど、どうしたらいいかわからない」「語学力に自信がないから話しかけにくい」といった声があり、留学生側・日本人側双方にコミュニケーションを取りたいという意思があるものの、その機会が十分に得られていないことが示唆される。

大学内で留学生と日本人学生の接触の機会を増やす必要性は以前より議論されており、留学生と日本人学生が共に学ぶ合同授業・協働学習の試みは 90 年代から報告されている（門倉、1996）。現在、留学生と日本人学生の合同授業・協働学習は教室内だけではなく、異文化交流会の実施（園田他、2006）、多文化交流合宿（小松、2015）、地域理解活動（中島、2014）といった形で広がりを見せている。本稿では、留学生と日本人学生の異文化接触および協働学習の場を提供する活動の実践例として、日本語スピーチ大会支援による異文化間教育の試みについて報告する。

## 2. 日本語スピーチ大会支援活動の経緯

本学経営学部の行事として開催されていた留学生による日本語スピーチ大会（以下、スピーチ大会）が、全学行事として実施され始めたのは 2011 年で、2017 年には第 7 回を迎

---

<sup>1</sup> 本稿は 2016 年 9 月に開催された日本語教育国際研究大会 2016 の Proceeding 「日本語スピーチ大会支援を通じた異文化間教育の試み」に新たなデータを加えて改稿したものである。

えた。毎年テーマ設定をした上で留学生がスピーチをし、学内外の審査員による審査を経て賞を決めるという流れで実施している。例年約 10 名の留学生がスピーチ大会に出場しているが、学部生、大学院生、交換留学生、研究生とさまざまな身分の留学生が出場している。表 1 は第 1 回から第 7 回までのスピーチ大会のテーマおよび出場者数を示したものである。

表 1 日本語スピーチ大会のテーマと出場者数

回	年度	テーマ	出場者数	出場留学生の身分
1	2011	私の見つけた日本	10 名	学部生・大学院生・研究生
2	2012	今の〇〇に伝えたいこと	10 名	学部生・大学院生・交換留学生・研究生
3	2013	私を変えた〇〇	9 名	学部生・大学院生・交換留学生・研究生
4	2014	私の挑戦	8 名	学部生・大学院生・交換留学生
5	2015	私の国から伝えたいこと	10 名	学部生・大学院生・交換留学生・特別聴講生
6	2016	私を変えた言葉	10 名	学部生・交換留学生・研究生
7	2017	私にとって一番大切なもの	11 名	学部生・大学院生・交換留学生・研究生

スピーチ大会は初中級の部と中上級の部の 2 部に分かれており<sup>2</sup>、開催年度により差はあるものの、スピーチには 3 分から 4 分の制限時間が設けられている。さらに、本スピーチ大会の特徴として、スライドの使用が認められており、これも開催年度で異なるが、4 枚から 6 枚のスライドの使用が許可されている。

第 1 回目から第 3 回目までは主に日本語の授業を担当する教員によって留学生のスピーチ原稿の推敲や発表の練習が行われていたが、「日本人学生がスピーチ大会に出場する留学生を支援する」というアイデアのもと本活動の準備が進められた。検討の結果、教養教育科目<sup>3</sup>である「国際理解」科目の一部をスピーチ大会支援活動のためにあて<sup>4</sup>、留学生と日本人学生に異文化接触の機会および学びの場を提供することを試みた。

### 3. 国際理解科目「国際理解：国際交流における日本語の役割」の概要

本稿では 2016 年 12 月に開催された第 6 回日本語スピーチ大会のための支援活動について報告する。スピーチ大会支援を目的として開講された授業は教養教育科目の「国際理解：

<sup>2</sup> 第 7 回日本語スピーチ大会では出場希望者の数が十分ではなかったため初中級の部は開催されなかった。

<sup>3</sup> 2017 年度より全学教育科目に名称が改訂された。

<sup>4</sup> 第 5 回日本語スピーチ大会については教育人間科学部の専門科目である「国際学 IIC」科目の一部をスピーチ大会支援活動にあてた。

国際交流における日本語の役割」で、受講生は29名、そのうち4名が学部留学生、1名が交換留学生であった。この授業の目標は、「留学生のスピーチ練習のサポートを通して、留学生が感じている日本語学習や日本ででの生活の困難な点を理解できるようになる」「留学生にとってわかりやすい日本語を考えることで、日本語を客観的に分析できるようになる」「異なる文化背景を持つ人々と積極的に交流することができるようになる」であった。

受講生全員がスピーチ大会に参加できるように、授業の開講時間とスピーチ大会開催時間を合わせ、授業は3限の時間帯（13:00-14:30）で、スピーチ大会は同じ曜日の12:30から14:30の時間帯で設定をした。全15回の授業のうち、スピーチ大会支援のためにディスカッションや実践活動を行ったのは5回目から11回目の授業である。表2は授業の概要と課題を示したものである。

表2 「国際理解：国際交流における日本語の役割」授業の概要と課題

回	授業概要	提出課題
1	授業の概要について説明・国内外の日本語教育	
2～4	講義（異文化コミュニケーション・学内外の留学生支援の実際・第二言語習得理論）	講義に関するレポート
5	スピーチ大会について説明 ディスカッション：学習者の日本語を知る （前年度のスピーチ視聴）	
6	ディスカッション：学習者の作文の推敲の仕方について考える スピーチ大会に出場する留学生と対面	
7	スピーチ大会に出場する留学生とグループメンバーによる原稿の推敲（各グループで授業外の時間を設定することも可能）	
8	実践活動（原稿の推敲）振り返り ディスカッション：スピーチの改善の仕方について考える スピーチ大会当日の役割分担を決める	実践活動記録1 （原稿の推敲）
9	スピーチ大会最終準備とリハーサル	
10	スピーチ大会当日（12:30～14:30）	実践活動記録2 （発表の練習）
11	実践活動（発表練習）とスピーチ大会振り返り ディスカッション：スピーチ大会の改善に向けて	スピーチ大会 振り返りレポート
12～15	やさしい日本語 やさしい日本語書き換えプロジェクト発表	期末レポート

#### 4. 支援活動の振り返り：国際理解科目受講生の実践活動記録からわかったこと

国際理解科目の受講生には実践活動の記録として、スピーチ原稿の推敲と発表練習について、活動を行った日時、活動内容、アドバイスする際に気をつけたこと、うまくいったと思う点とうまくいかなかったと思う点、感想を記述して提出するよう指示した。

##### 4-1 スピーチ大会支援活動がどのように行われていたか

受講生の実践活動記録から、スピーチ原稿推敲のための活動には各グループ平均 75.5 分の時間を費やしたことがわかった。さらに、10 グループ中 5 グループからは複数回にわたり留学生と対面形式で原稿について話し合いをしたことが報告されている。推敲の仕方としては、グループメンバーで先に原稿を読み意見をまとめてからアドバイスをする、留学生に原稿を読んでもらいながらそれぞれがアドバイスをする、まず留学生にどのような意図でスピーチ原稿を書いたかを話してもらってから原稿を読む、など様々であった。

また、発表の練習のための活動には各グループ平均 64 分の時間が費やされていたことが報告からわかった。どのグループもほぼ共通して、原稿の読み、スライドのチェック、時間を計測しながらの練習、目線やジェスチャーの確認が行われていたことが報告されている。

##### 4-2 スピーチ大会支援活動を通して得た気づきや学び・困難を感じた点

スピーチ大会支援活動全体を通して受講者にどのような気づきや学びがあったのか、そして特に困難を感じたことは何だったのか実践活動記録から関連した記述を抜粋したところ、「他者理解」「異文化理解」「スピーチ原稿の推敲や発表練習の支援の難しさ」の 3 つに分類が可能となった。次項の表 3 はそれら 3 つの分類をまとめたものである。

受講生の気づきや学びは、スピーチ大会支援を通して留学生が伝えたいことや彼らの価値観を理解できるようになったという「他者理解」の側面と、異なる文化背景を持つ留学生と接したことで意識するようになった「異文化理解」の側面に分けられた。

スピーチ大会支援グループは支援される留学生も含めてメンバー全員が初対面というグループがほとんどであった。そのような状況で、短い期間に顔を合わせる時間を作り、スピーチの内容について質問したり、原稿を推敲する際に話し合いをすることで受講生は留学生の価値観を理解し、それを尊重しようとしていたことがうかがえた。それは文化背景が異なるからというわけではなく、留学生を一人の個人として捉え、彼らがスピーチ発表を通してどのようなことを聴衆に伝えたいのかを理解しようとしていた他者理解の表れである。また、留学生だけではなく他のグループメンバーと自身の考えにも違いがあることに気づき、グループメンバーの意見も尊重しようとしたという記述もみられた。

表3 スピーチ大会支援を通して国際理解クラス受講生が得た気づきや学び・  
困難を感じた点（表中の鉤括弧内は報告例）

気づきや学び・ 困難を感じた点の分類	気づきや学び・困難を感じた点の下位分類と報告例
他者理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 活動を通して相手を理解できるようになった 「お互いに理解しようとする気持ちがあった」「意思を認めようと努力した」</li> <li>● 相手の価値観を認められるようになった 「異なる考えが理解できるようになった」</li> <li>● 相手の気持ちに配慮して行動しようとした 「自分の考えを押し付けるのは間違っている」</li> </ul>
異文化理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 言語の違いからくるコミュニケーションの難しさを感じたり、またそれを乗り越えようとした 「コミュニケーションが大変だった」「(大変だったが)方法一つで相手に気持ちが伝わる」</li> <li>● 異文化環境にいる留学生が感じている困難に気づき気遣うことができた 「(留学生が)他言語・多文化を深く理解するには時間がかかったはずである」</li> <li>● 自身が考える常識が異文化では受け入れられないかもしれないことに気づいた 「何気なく使っている表情や仕草でも間違った印象を与えてしまうことがある」</li> <li>● 文化や言語が異なっても分かり合えることに気づいた 「生まれ育った国が違っていてもよい影響を与え合える」</li> <li>● ステレオタイプのイメージが必ずしも当てはまらないことに気づいた 「～人のイメージとは違っていた」</li> </ul>
スピーチ原稿の推敲や 発表練習の支援の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 原稿をどの程度修正すべきか迷った</li> <li>● 日本語の文法を説明するのが難しかった</li> <li>● 発表のためのアドバイス（暗記方法、イントネーション、発音等）をするのが難しかった</li> </ul>

しかし、他者を理解しようと思っても異なる言語・文化背景を持つ留学生との活動は必ずしもスムーズではなく、特に言語の違いが壁になりコミュニケーションに困難を感じたというコメントも報告されていた。ただし、難しいと感じながらも、ジェスチャーを使ったり具体例を出すなどして、相手と意思疎通を図ろうとしている努力の跡が実践活動記録から読み取ることができた。ある初級の学生を担当したグループからは、日本語でも英語でも原稿の詳細部分について相談することが難しかったため、担当している留学生と母語が同じで日本語能力の高い学生にも推敲活動に加わってもらったという報告もあった。

また、言語だけではなく、異なる文化背景を持つ留学生と接することで彼らが日々感じている困難を知ることができ、互いの価値観の違いや共通点に気づいたことが感想として記述されていた。相手の言語や文化背景が異なるからといい、「異」の部分だけに目を向けているのではなく、言語や文化を超えて理解し合える部分があるという気づきや、今まで思っていたイメージはステレオタイプであり、実際にその国から来た留学生と接してみると自分と共通の価値観を持っていることがわかったなどのコメントもあり、支援活動が受講生の異文化理解に影響を与えたことが示唆された。もちろん受講生の経験は必ずしもうまくいった事例ばかりではないが、たとえ彼らが感じたことが「難しかった」ことや「できなかった」ことであっても、受講生が留学生自身や留学生を取り巻く環境を理解する上で気づきを得たことには変わりはない。異なる文化背景を持つ留学生と密に接することで得られた気づきや学びの存在は、スピーチ大会支援活動が異文化間教育の役割を担っていたことを表しているのではないだろうか。

以上は「他者理解」および「異文化理解」に関する記述をまとめたものであるが、他にもスピーチ原稿の推敲や発表の練習に難しさを感じたというコメントも多くみられた。特に多かったのは日本語が母語ではない留学生が書いたスピーチ原稿をどの程度修正すべきなのか迷ったというものであった。留学生の書いたスピーチ原稿の中に見つけた文法の間違いや語彙の不自然さを日本語母語話者が書いたスピーチ原稿のように修正することはそれほど難しくはないはずであるが、留学生の選んだ語彙や表現を残そうとしたり、留学生が理解できないままスピーチをすることのないよう適切なレベルの文法を提案するなど努力していたことがうかがえた。

発表の練習に関しては、発音やイントネーションの不自然さをどう直していいかわからなかった、どうすればスピーチが暗記できるかいいアドバイスができなかったなどが書かれていた。ほとんどの日本人受講生にとって、留学生の書いた原稿を修正したり、スピーチ発表の練習にアドバイスしたりするという活動は初めてだったと思うが、グループで協力しながら留学生の意思を尊重して支援活動を行っていたことが明らかになった。

また、受講生のうち5名は留学生であったが、彼らも積極的に原稿の推敲に協力していたようで、「日本語学習者として（語彙や表現を学んだという意味で）新たな発見があった」「外国人のサポートをする側なのに、自分も勉強になった」といった感想が報告された。留学生が留学生をサポートすることについて、支援する側の留学生からは好意的な反応が得られたことがうかがえる。

最後に、本番が近づくにつれ支援する側のスピーチ大会に対する意欲が高まっていることを示すコメントも印象的であった。「何とか（結果を出して）いい思いをさせたい」「本

番で力を発揮してもらいたい」「最後までサポートしていきたい」など、留学生が本番で十分力を出せるよう支援活動に取り組んでいる様子が報告されていた。

国際理解科目の受講生の活動を総合的に評価すると、個人差はあるものの、「留学生のスピーチ練習のサポートを通して、留学生が感じている日本語学習や日本での生活の困難な点を理解ができるようになる」「留学生にとってわかりやすい日本語を考えることで、日本語を客観的に分析できるようになる」「異なる文化背景を持つ人々と積極的に交流することができるようになる」という目標は、多くの学生が到達することができたと判断した。さらに、大学が実施する授業アンケートの結果からみると、授業に「総合的に満足したか」という問いに約8割の学生が「非常にそう思う」と回答したことから、スピーチ大会支援が主な活動内容である国際理解科目が満足度の高い授業であったことが明らかになった。

#### 5. 支援活動の振り返り：スピーチ大会に出場した留学生の声からわかったこと

国際理解科目の受講生の実践活動記録からは、活動が概ねうまくいったことが示唆されたが、支援される側の留学生はスピーチ大会支援活動をどう感じていたのだろうか。スピーチ大会に出場した留学生の意見を聞くために、第4回から第6回スピーチ大会に出場した留学生28名にメールによるアンケートを実施した。そのうち20名から回答があり、以下のような結果が得られた。

まず、スピーチ大会に出場した感想としては「とてもよかった(11名)」と「よかった(8名)」「まあまあだった(1名)」という結果が得られ、回答を提出した出場者のみの意見ではあるが、満足度が高かったことがわかる。次に、支援グループによる活動については「とても役に立った(10名)」「役に立った(8名)」とほとんどの学生が役に立ったと感じていたのに対し、1名の学生は「あまり役に立たなかった」、そしてもう1名は「どちらでもない」と回答していた。これらの回答の理由として、「文法は直してくれたけど、語用論的、文化的なことは指摘してくれなかった」、「支援する人が留学生だったので、日本人がよかった」とコメントしていた。支援する側の留学生からは、自身が留学生であることを否定的に捉えている様子はなく、実践活動記録では留学生であるからこそ学べたことについて肯定的に述べられていたが、支援される側からこのような反応があったことは、今後活動を続ける上で留意しなければならない点である。

さらに、支援グループによる支援活動のうち「原稿の推敲」と「発表の練習」のどちらが役に立ったか回答を求めたところ、「原稿の推敲」と答えた留学生が15名、「発表の練習」と答えた留学生が4名で、残り1名は「どちらも」と回答していた。その理由としては、スピーチの原稿を他人に読んでもらうことで意図しているメッセージが伝わっているか、



わかりやすいか、そして日本語に間違いがないかを知ることができたと述べられていた。

支援グループによる支援体制についてよかった点、よくなかった点についても回答を依頼したところ、日本人学生と有意義な交流ができた、同じ立場（学生）の人からのコメントだったので受け入れやすかったといったという肯定的なコメントが多かった。留学生の一人からは「最初は「自分の力で戦わないと意味がない、サポーターが要らないし面倒くさい」という思いもありましたが、この経験を通して、やはり多くの人に聞かせるスピーチなので、自分の力はどうであれ、自分の伝えたいことをうまく伝えないともったいない、ご協力はありがたいと考えられるようになりました（原文ママ）。」という感想が寄せられ、はじめはサポーターの力は不要だと思っていた学生も、支援を受け入れ、自分のスピーチをよりよいものにしようと努力していたことがわかった。

一方、今回のスピーチ大会の支援活動の難しかった点として、「時間調整」があげられることが今回のアンケートから判明した。支援グループが2名または3名であったため、スピーチ大会に出場した留学生を含めると3名または4名で時間調整をする必要があり、時間を合わせて集まって活動することに煩わしさを感じた学生もいたようである。中には、教員が時間を指定して活動をするべきだという意見や、1対1の支援のほうが良いという提案も寄せられた。

その他、特徴的なコメントとしては、支援グループのメンバーの中には支援する意欲がない、または他の学生と比べて意欲が低い学生がいたという声もあった。授業の課題の一つである実践活動に対してどのぐらい意欲的に取り組むか、国際理解科目の受講生の間で差があったことがうかがえるが、これは実践活動記録からは見えてこなかった一面である。

上記のように満足度に多少の差はあったようであるが、今回のアンケートに回答した留学生のほとんどはスピーチ大会支援活動について「ありがたかった」「役に立った」「有意義な活動だった」と述べており、国際理解科目の受講生同様、支援活動を肯定的に捉えていることが明らかになった。

## 6. まとめと今後の課題

以上が本学で実施された日本語スピーチ大会支援による異文化間教育の試みの概要であるが、この活動は現在も試行錯誤の段階である。今後の課題としてあげられることとして、まずは教員による介入の程度があげられる。加賀美・小松（2013）は授業などを通じて異文化接触の機会を与えることを「教育的介入」と定義しているが、日本語スピーチ大会支援活動も教育的介入の一例であると言える。これまでは支援グループメンバーとスピーチ大会に出場する留学生がなるべく自主的に協働作業が行えるよう、支援の具体的な方法に

についてはあまり指示を与えなかったが、そのせいで支援される側に不公平感を感じさせる可能性があることが示唆された。意欲的にスピーチ大会への出場を希望している留学生に最大限の力を発揮してもらえよう、支援のための準備を再検討する必要がある。ただし、留学生と日本人学生の間には誤解や摩擦が起こることも異文化間教育で得られる学びであり、介入の程度を高めることが必ずしも学びの質を高めるとは言い難い。今後は、スピーチ大会に出場する留学生に活動の意図を十分理解してもらうこと、また、問題が起こった時のサポート体制を整えるなどの改善を図りたいと思う。

もう一点考えなければならないのは、評価の方法についてである。今回、スピーチ大会の支援に関しては出席のほか、実践活動記録とスピーチ大会の振り返りレポートで評価をしたが、実践活動のために費やした時間や労力には個人差があることがわかった。さらに、受講生本人の提出物からだけではどのくらい積極的に支援をしていたか判断が難しい。自己評価やピア評価を含め、何らかの形で彼らの学びや貢献度をより客観的に評価する方法を考えたい。

グローバル人材育成が大学教育の一つの柱になっている今、日本人学生にとって留学生の存在は貴重な学びの資源であると言える。當作(2014)はグローバル人材育成には異なる文化背景を持つ者など、接する相手によりアプローチを変える能力の養成が必要だと述べているが、留学生と日本人学生が一つの目標に向かって活動を行うことで、そのような能力が養われることが期待される。留学生と日本人学生双方に異文化接触と学びの機会を提供できるよう、今後も本活動を継続したいと考える。

#### 参考文献

- 加賀美常美代・小松翠(2013)「大学コミュニティにおける多文化共生」加賀美常美代(編著)『多文化共生論-多様性理解のためのヒントとレッスン-』明石書店
- 門倉正美(1996)「留学生と日本人学生との混成クラスの試み-教養教育「異文化間コミュニケーション論」授業報告」『横浜国立大学留学生センター紀要』第3号、pp.55-67.
- 小松翠(2015)「留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験とはどのようなものか-多文化交流合宿3か月後のインタビューから-」『お茶の水女子大学人文科学研究』第11号、pp.165-179.
- 園田博文・奥村圭子・内海由美子・黒沢晶子(2006)「留学生と日本人学生の交流活動実践から見えてくるもの-「気づき」を通じた異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて-」『山形大学紀要(教育科学)』第14巻、第1号、pp.11-33.
- 當作靖彦(2014)「グローバル人材育成のために-社会と教育の果たすべき責任とは」西山教行・平畑奈美(編著)『「グローバル人材」再考』くろしお出版

独立行政法人日本学生支援機構(2017)「平成 28 年度外国人留学生在籍状況調査等について」[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student/data2016.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/data2016.html) (2018 年 1 月 8 日閲覧)

中島祥子(2014)「多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び—留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから—」『鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学編』第 65 号、pp.133-148.

藤井桂子(2014)「留学生は何に困難を感じているか—2003 年と 2012 年のアンケート調査結果から—」『ときわの杜論叢』第 1 号、pp.145-171.